SOUND?

●ロンドンでは、日本のテクノが「テクノ」なのかもしれない

あと、ジャズ。あのモードちょっと入ったスノッブなジャズじゃなくって、シッチャカメッチャカ。フリージャズもかかるし、歌モノもかかるし、ジャジーなハウスもかかるしワゴン・クライストみたいなフリーキーなフリージャズみたいなのもかかるし、DJもシッチャカメッチャカに曲をかけている。ロンドンでみんなが異口同音に言っていたのは、“ジャズ・ビストロ”。ただのレストランなんですけど、そこが今スポットとしては一番おもしろいという話です。DJがめちゃめちゃな選曲で、黒人から白人からパンクスからレイバーから集まっているという。その辺から、何か生まれてくるものもあるかなと思います。そういうふうに考えると、何がテクノだということになると、ロンドンでは日本のテクノのことがテクノかもしれない。だからロンドンとかのレコード屋さんに行って、「何かテクノない？」って言うとケン・イシイくんとかヨシヒロ・イワサキとか出てくるかもしれない。

ダニエル・プールっていう有名なテクノの服を作っているブランドの本店がロンドンのコヴェントガーデンっていうところにあるんですけど、ほとんど日本から来たお客さんしか行っていない。ネイティブのロンドンの人で全身ダニエル・プールっいう人はあまり見たことないです。卓球氏はこの辺を逆手にとって、ダニエル・プールの日本語がプリントされているシャツを着ていたりするんだと思うんですけど。

●セカンド・サマー・オブ・ラブのころ

レイヴ・ムーブメント(※)以前は、テクノポップだったりドイツのプログレや実験音楽というものは、もともとあったラテンとかハウスやヒップホップとは相まみえるものではなかったと思います。レイヴ・ムーブメントは、エクスペリメンタルでプログレッシブな部分とダンス・カルチャーとその2つが出会ったことによっておもしろかったわけです。

それは、いわゆるセカンド・サマー・オブ・ラブ(※)と言われている87、88年くらい。レイヴ・ムーブメントがあったとき、おたくのみなさんがハデなシャツを着てクラブに行きだした。もしくは、コンピュータに全く興味がなかったストリート小僧が、「ちょっとMac渋くな〜い？」とか言ってコンピュータに触れるようになった。それ以前にはそんなことは絶対考えられなかったことで、これは見逃しちゃいけない文化史だと思います。

●デトロイト・テクノ

また、同じころアメリカで、ケビン・サンダーソン、ホアン・アトキンス、デリック・メイの3人の黒人によって、デトロイト・テクノが起こった。彼らがなぜ打ち込みを始めたかというと、アルビン・トフラーの『第3の波』にホアンが感銘を受けて「おまえら、これを読め」と。彼らは、スーツ着てパーティ開いてDJとかやってたらしいんですよ。クラフトワークとかデペッシュ・モードとかかけて。そこでかける曲を自分たちで作るようになって、そこからデトロイト・テクノが始まった。それが87年ですけど、実際に評価されるのはそれ以降、イギリスで紹介されてからです。

オリジナル・デトロイト・テクノが聞けるCDは、トランスマット・レーベルのコンピレーション『Relics』が一番いいと思います。あと、ほんとに興味がある人は『History of the House Music』というのが、探せばあります。

デトロイト・テクノの音楽的な特徴というのは、メカニックで冷たい部分と、牧歌的といえるほどのどかで暖かみのある部分が混在しているものだと思っているんです。あと、黒人ですから奇妙なグルーヴ感がある。3連のハネとかが多かったんですよね。その上にサントラのような、荘厳なストリングスが乗っかるという。

●アナログ・シンセからサンプラーへ

インテリジェンス系テクノというのは最初トランスとかの機能的なテクノ、フロア指向のテクノに対抗する形で出てきたと思うんですけれど、2年ぐらいたって思うのは、インテリジェンス系といわれていた人達で今ちゃんと生き残っててかなりおもしろいことやってる人達っていうのは、例えばプラッド(※)とかグローバル・コミュニケーションとかワゴン・クライストぐらい。

ああいう人たちがどうして生き残っているかというと、ただのイッちゃってる系だからかもしれない。頭いい音作りですごいなあと思うんですけれどでも、「どっかやばいぞ、壊れてるわ」っていうところがおもしろいんだと思うんですよ。それはちょっと知性とかいう部分とは違って、逆に静かであればあるほど暴力的に聞こえる。

最近はもう“インテリジェンス”という言葉が出てこなくなりましたけど、それはやっぱり時代でしょう。テクノに限らず、みんなリアリティが欲しいんだと思うんですよ、汗臭

【トランス】
ハートハウス、アーバンといったレーベルが有名。
【ハードフロア】
ラモン・ゼンカーとオリバー・ボンズィオによるユニット。ファースト『TBリサスエイション』のアシッドなTB-303+TR-909サウンドでクラブ・シーンの流れを変えた。
【エイフェックス・ツイン】
イギリスの青年、リチャード・D・ジェームスによる1人ユニット。ポリゴン・ウィンドウ、コースティック・ウィンドウ、AFXといった名義でも活動。フィリップ・グラスとも共作したりしている。
【グローバル・コミュニケーション】
トム・ミドルトン、マーク・プリチャードによるユニット。リロード、リンク名義でも活動している。
【プロディジー】
サウンド・プロダクションのリアム・ハウレットを中心に、ダンス×2、MC×1という4人ユニット。
【インテリジェンス・テクノ】
クラブ・プレイを無視したリスニング主体のテクノ。WARPレコードが始めたアーティフィシャル・インテリジェンス・シリーズがそのスタートとなっている。
【ワゴン・クライスト】
リチャード・D・ジェームスと同じコーンウォール出身。クラシックの教育を受けドラマーとしてファンク・バンドに参加していたという経歴を持つルーク・ヴァイバートによる1人ユニット。
【レイヴ・ムーブメント】
80年代末にイギリスで盛り上がった、倉庫、野外あるいは路上などクラブ以外の場所での非合法アシッドハウス・パーティ。大きなものは1万人以上を集めた。90年代のヒッピー・カルチャー。
【セカンド・サマー・オブ・ラブ】
88年にイギリス起こったダンス・カルチャー・ムーブメント。60年代にサンフランシスコで起きたフラワー・ムーブメント(サマー・オブ・ラブ)と様相が似ていたことから、ジャーナリズムによってこのように呼ばれることとなった。
【プラッド】
ブラックドッグ解散後、アンディとエドの2人によって結成されたユニット。マインド・オーバー・リズムのアルバムに数曲参加。
【アナーキック・アジャストメント】
デザイナーのニック・フィリップのブランド。「A」のロゴで超有名。最近では、SMAPの香取慎吾が長袖Tシャツ“JUST LIKE CANDY”を着ているのを確認。「コネクテッド」店内には、DJブースも置かれている。
【ゴア】
インド西海岸にあるヒッピーの聖地・ゴアで野外レイヴ・パーティが行われるようになり、そこでプレイされていたトランスが進化したもの。

【エレクトロ】
クラフトワークやアフリカン・バンバータなどを思わせるエレクトロ・ビートが特徴。代表的なアーティストにWARPレコードのエレクトロイドなどがいる。
【ハウズ】
80年代中後期、シカゴの黒人ゲイクラブでプレイされた、ソウルのリズムとヨーロピアン・エレクトロ・サウンドをミックスするDJスタイルが起源。
【ジャングル】
倍速ブレイクビーツにレゲエの要素を取り入れたリズムが特徴だが、最近ではアンビエントやジャズの要素が加わるなど多様化している。ムービング・シャドウといったレーベルが有名。
【トリップホップ】
ヒップホップのリズムの上に、エフェクトやトリッキーなシンセ・サウンドを乗せたもの。アーティストでは、セイバース・オブ・パラダイス、ケミカル・ブラザーズなど。レーベルではモ・ワックス・レーベルなどが有名。
【DJ KRUSH】
ヒップホップDJとして活動していたが、モ・ワックスからの2ndがNME誌インディー・チャート初登場2位を獲得。以来、世界中で注目を集めるトリップホップDJとして知られる。